

Title	内陸アジア言語の研究 IX 裏表紙
Author(s)	
Citation	内陸アジア言語の研究. 9
Issue Date	1994-06
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/21555
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

『内陸アジア言語の研究』執筆要項

1. 本誌は、中央アジアと中国を中心に東は東北アジアから西は黒海沿岸にまで広がる中央ユーラシアの諸民族が用いる様々な言語、及びその言語で書き残された古代～近代の文献資料（出土文書・碑文・宗教典籍など）を、言語学的あるいは歴史学的に扱う論文を掲載するものとする。
2. 原稿は未発表のものに限る。ただし口頭発表したものはこの限りではない。
3. 原稿の長さは自由であるが、論文の場合、刷り上がり状態で20ページ（400字詰め原稿用紙に換算して50枚）を一応の目安とする。ただし数ページ程度の研究ノートや資料紹介の類も歓迎する。
4. 原稿は完全原稿の形で提出されたものを、フロッピー入稿で受け付ける。特に30ページを越えるものについては、経費軽減のため、マッキントッシュにて割り付け済であることを原則とする。
5. フロッピー入稿について
 - 1) マッキントッシュの場合
組版はMacintoshのAldus PageMaker-Jを用いて行なうので、執筆者は統一書式に則って、ページメーカーにて割り付け済の原稿をフロッピー入稿されるのが最も望ましい。割り付け時のスタイルなどを指定したテンプレートや組方規則、外字フォントなどのソフト面については、編集部を用意してあるので相談されたい。
 - 2) MS-DOS テキストファイルの場合
「太郎」など、MS-DOS テキストファイル形式でフロッピー入稿される場合は、必ず2DD フロッピーディスクを使用すること。その際、フロッピーとともにワープロで印字した完成原稿を添付し、ワープロにない漢字・記号などの部分は、当該箇所を空けて朱筆で指示する（旧字体への変更指示も必ず提出稿の段階で付けること）。本文中の註番号は、該当箇所に(1)のように通し番号を挿入する。
以上はあくまでも原則である。不明な点は編集部にお問い合わせされたい。
6. 書式として、以下の統一方針を定める。
 - 1) A5版横組み奇数頁起こしとし、本文は35字×27行、脚註は38字×40行とする。
 - 2) 原則として脚註形式とし、引用文献は論文末尾に一括掲載する。
 - 3) 句読点は「，．」を用い、「、。」は用いない。
 - 4) 地の文にはつとめて当用漢字・新かなづかいを用い、旧字体・旧かなづかいの使用は引用文等で必要な場合のみにとどめる。
7. 論文末尾に執筆者の所属・肩書、表題の英訳、執筆者名のローマ字表記を付けること。
8. 原稿の締切日は毎年12月31日とする。
9. 校正については、初校は著者校正とし、再校以降は原則として編集委員の責任とする。校正はあくまでも誤植の訂正にとどめ、原文の増減は認めない。
10. 抜刷は作成しない。執筆者には本誌10部ずつを献呈する。

執筆者

荒川正晴

早稲田大学文学部非常勤講師 東洋史学専攻

石濱裕美子

早稲田大学第二文学部非常勤講師 東洋史学専攻

森安孝夫

大阪大学文学部教授 東洋史学専攻

武内紹人

京都教育大学助教授 言語学専攻

吉田豊

神戸市外国語大学助教授 言語学専攻

Nicholas Sims-Williams

Lecturer, School of Oriental and African Studies (University of London)

古代・中世イラン語文献学専攻

内陸アジア言語の研究 IX

1994年6月10日 印刷

1994年6月30日 発行

〒651-21 神戸市西区学園東町9-1

発行者 中央ユーラシア学研究会

(神戸市外国語大学吉田研究室)

電話 078-794-8248

〒606 京都市左京区吉田神楽岡町8

取扱店 株式会社 朋友書店

電話 075-761-1285

〒440 豊橋市向山台町10-10

印刷所 有限会社 中部ワードサービス

STUDIES ON THE INNER ASIAN LANGUAGES IX

M. Arakawa : On a Turkic Term "ulay" in Turfan Chinese Documents	1
Y. Ishihama : Buddhistic Background of the Meeting between Panchen IV and Emperor Qian-long held in 1780	27
T. Moriyasu : Notes on Uigur Documents (IV)	63
T. Takeuchi : 'Lead' and 'Face' : on the Formation of Honorific Vocabulary in Tibetan	95
Review	
W. Sundermann : <i>Der Sermon vom Licht-Nous : eine Lehrschrift des östlichen Manichäismus</i> , (BTT 17), Berlin 1992. by Y. Yoshida	105
Bibliography of N. Sims-Williams	113

The Society of Central Eurasian Studies
(Kobe City University of Foreign Studies)

1 9 9 4